

17. 胃瘻交換

〈交換前の準備〉

- 1) 製品の確認：開包する前に、使用予定である胃瘻バルーンボタンのシャフト外径（Fr）およびシャフト長（mm）の確認を行う。
- 2) バルーンの検査：滅菌蒸留水をバルーン内に注入し、漏れ、片膨れ等の異常がないことを確認する。バルーンの検査後はバルーン内の滅菌蒸留水を完全に抜き、バルーンが収縮することも確認する。

〈交換方法〉

- 1) 胃瘻孔周囲の皮膚を清拭する。（ウエットテッシュを使用）
- 2) シャフト先端および胃瘻孔にカテーテルゼリーを塗布し、胃瘻孔に沿って慎重に胃内に挿管する。
- 3) 必要により（瘻孔が狭窄や斜めで挿入しにくい場合）留置されていたカテーテルを抜去する際に、胃瘻孔内にスタイレットを挿入（留置）する。この場合は、あらかじめ、バルーンボタンの注入口にアダプタ（逆止弁開口用）を装着し逆止弁を開口させた状態で挿管したのち、注入口よりスタイレットのみ抜去する。
- 4) シリンジを用いてバルーン内に各バルーンボタンの推奨容量の滅菌蒸留水を注入する。
- 5) 胃瘻バルーンボタンが瘻孔内でスムーズに回転することを確認する。
- 6) バルーンボタンの注入口にフィーディング・減圧チューブを接続して、胃液や経腸栄養剤など胃内容物の吸引が出来るかを確認する。胃内容物がないと逆流の確認が困難であるため、この時に白湯を適量（20～50ml）あらかじめ注入するなどしておく。
- 7) 医療施設での確認（行わない施設あり）：カテーテル交換後の確認方法は、直接法と間接法に分類される。直接法とは、胃内視鏡検査により、胃瘻カテーテルの先端およびバルーンを直接視認することにより、カテーテルの胃内への挿入を確認する方法である。一方、間接法とは胃瘻カテーテルの先端およびバルーンを直接視認することなく、X-P 検査でカテーテルの胃内への挿入を確認する方法で、造影剤や空気を注入して行う。